

## Web3.0 への提言

### The Suggestion for Web3.0

柳田 和佳奈

Yanagida Wakana

文化マネジメントコース

2005年9月に米国の技術出版社代表のティム・オライリーが『what is web2.0』という論文を発表した。「Web2.0」とは、先人達が半世紀かけてきた歩みと、それによって引き起こされたパラダイムシフトの象徴ともいえるだろう。

しかし、もはや「Web3.0」という言葉が囁かれはじめている。ソフトウェアのバージョンアップになぞらえて名付けられた「Web2.0」。その「2.0」においても補完されないなにかがあるからこそ、人々は「3.0」を待ち望んでいるのではないだろうか。ならば私達に今必要とされているものは何だろうか。よって Web2.0 以降の鍵をさがすことが本論の目的である。

### インターネット・コンピュータの理念

世界最初のコンピュータが誕生したのは1946年のENIACだとされている。これは重量約30トン、真空管約18000本、床面積1800フィートにもおよぶ巨大なコンピュータであった。その後1960年代からはIBMがコンピュータ産業をリードしていくが、当時IBMが製造するコンピュータはENIACのような、巨大で高額な「メインフレーム（大型汎用コンピュータ）」であった。メインフレームは中心となるコンピュータ（ホスト機）に多くの端末のコンピュータが繋がっているという「閉鎖型」のコンピュータであった。メインフレームはその大きさ、金額、また操作方法、すべてにおいて一般の人々が持てるようなコンピュータではなかった。

しかし、マイクロプロセッサ（超小型演算機）の発明がコンピュータを「大型」「閉鎖型」から解放した。マイクロプロセッサはわずか数センチ角のシリコンチップに数百万の素子を搭載しており、安価で、消費電力が、少なく、大量生産が可能となった。これによって「マイコン」の時代を迎える。これによってガレージでもコンピュータが組み立てられる時代になり、これがビル・ゲイツやスティーブ・ジョブスらを育んだ土壌ともいえるだろう。

その「マイコン」を「パソコン＝（パーソナル・コンピュータ）」にまで進化させたのは、1945年にまで遡る先人達の「コンピュータ観」であった。それは「人間の能力を拡張させるもの」としてコンピュータを見つめる視点である。ヴァネヴァー・ブッシュは1945年に『人の思考のように』という論文を発表している。そこでは人間の脳の複雑な「連想」に着目し、従来のアカデミックな分類による知識ではなく、人の思考を自由に拡張するものとして、コンピュータを捉えていた。このコンセプトに続くかのように、ダグラス・エンゲルバートやテッド・ネルソンらがマウスやハイパーテキストなど、「人間の拡張としてのパソコン」に大きく貢献した。そしてアラン・ケイがそのコンセプトを「パーソナル・ダイナミック・メディア」

という言葉で「増幅装置（アンプ）」「個人の目標や目的に対する能動的な延長戦」としてコンピュータを捉える視線を明確に提示した。このコンセプトをパッケージとして初めて「商品」となったものがマッキントッシュである。

このパソコンを支えた「情報が脳細胞のように相互連想的に結びつき、人間の知性を拡張していくことを可能にする」というコンセプトを一台の装置の中にとどまらず、世界中のネットワークの上に実現させたもの、それこそがインターネットだといえるのではないだろうか。

インターネットのコンセプトを提出したのは情報処理技術局の初代局長、J.C.R. リックライダーである。彼のコンセプトは「相互作用によって新しいものを生み出す」というものであった。マーシャル・マクルーハンはその未来を予見し「われわれは中枢神経組織を全地球規模に拡大し、あらゆる人間の経験を相互作用させることができるようになってきているのである。」と語っている。このような構想で始まったインターネットであったが、長い間「学者や研究者の道具」としてしか見られていなかった。しかしHTTP や URL といった規格をもつウェブの仕組み・基本概念が1989年に、ティム・バーナーズ＝リーによって考案される。彼によってWWW (World Wide Web) が開発され、無料開放された。それがインターネットの大衆化を進める最初のきっかけとなった。

その後多くの人々が無償で情報を Web 上に提供していった。

### Web2.0 という節目

「Web2.0 とは、新たなウェブの出現ではなく、ウェブのポテンシャルの実現、いわばウェブの再来であると私達は考えた。」と、「Web2.0」の提唱者、ティム・オライリーは語っている。

このように、コンピュータ・インターネットを開発してきた人々の目指していた理念の達成、一つの節目が Web2.0 と言えるのではないだろうか。しかし、その Web2.0 という時代においても、元自民党幹事長の加藤紘一氏の「人間が直接に交流する共同体一家族であれ、地域であれ、勤め先であれ、趣味の世界であれ、その生身の人間が交流する場を復活させないかぎり、この国の混乱は収まらないということでしょうね。」というような言葉が後を絶えない。それは、インターネットの理想と現実との齟齬が生れているからではないだろうか。ここでインターネットに受け継がれている思想背景にあたってみた。

### インターネットの思想背景

アメリカはキリスト教国家である。そして革新的なコンピュータ・

インターネットの技術がアメリカから生れているとなれば、その思想にもユダヤ＝キリスト教観が反映されてくるのも当然と言えるであろう。情報学研究者 西垣通氏によれば、ユダヤ＝キリスト教の価値観は唯一絶対を求める「普遍思想」と「論理体系」に象徴されるという。これは、例えば、Google のアルゴリズムによる情報検索や、Amazon の「あなたへのおすすめ」機能などに色濃く表れているのではないだろうか。Google は世界中の情報の体系化を掲げている。それはまさしく「神の視点」から情報を眺めるようなものであり、それは独自のアルゴリズムという名の計算式によって導き出せるというのだ。また Amazon は膨大なユーザーのデータとアルゴリズムを駆使し各人の好みの本や DVD などを進めてくる。それは「私」というものがまるで確固たる存在であり、演算によって導き出すことが可能であるかのようである。

また「アメリカ」という国の風土も Web2.0 に色濃く反映されている。そこにはオープン性、競争社会の実力主義、反権威主義、フロンティア精神、技術への信頼に根ざした楽観主義、行動主義などである。また、拡張の対象となる「個人」という強い概念があること、「明示的なルール」にのっとって共同体を形成することも特徴的である。このように、アメリカにおいて発展したインターネットは「唯一絶対」を求めるプロセスであり、「Web2.0」もひとつのメディアであるのだといえるだろう。

しかし、日本はそのような思想背景や風土がないまま、無自覚的にインターネットを受け入れた。日本人にとってインターネットは「利便性の高い技術」もしくは「人間関係調整ツール」として捉えられている面が強い。その結果、「リアルの外在化」や「壊れた人間関係の隙間を埋めるもの」としてインターネットが使われるような事態が引き起こされているのではないだろうか。

## Web2.0 以降の鍵

このような現状を前に、もう一度インターネットの理念に立ち返ってみよう。それは「人間の拡張」であった。日本人には強烈な観念としての「個人」がないとすれば、それは拡張すべきは「個人」が立ち現われる「いま・ここ」ではないだろうか。ここで「東洋的な価値観」がそのカギを握ってくる。

実に興味深い傾向が、60 年代・70 年代というコンピュータが開発されインターネットが生れた時代にみられた。それは 60 年代の麻薬使用（ターン・オン）と 70 年代の東洋志向（ターン・イースト）である。コンピュータの思想に大きな影響を与えたヒッピー文化は、この流れの象徴であるといえよう。この流れの一つには「ニューエイジ運動」や「ネオ・オリエンタル運動」があげられる。「ニューエ

イジ」とは、近代合理主義に彩られた古い時代が終わり、直観的な理解や快楽、万物を司る宇宙的な意志への信頼といった神秘的要素を基礎とする時代がやってくるとする考えである。また「ネオ・オリエンタル運動」とは 1970 年代にアメリカでみられた東洋宗教のリバイバルを指す。このようにインターネットが胎動し始めていた時代に「直観的」な東洋文化が求められたということは、web2.0 を迎えた私達が、立ち返る原点のようにも思えるのである。

その東洋的な文化としては、「禅」がまず一つあげられる。禅においては「直接的」な「経験」に重きが置かれ、すべては「相対的」に語られる。これは情報の本来の在り方と共鳴する節がある。「情報」とは本来私達が世界に接触することで立ち現われる「関係」であるからだ。

このようにインターネットが胎動し始めた時代に、東洋志向が見られたということは、決して偶然ではないだろう。「人間の拡張」はいいかえれば「わたしのいる いま・ここ の拡張」なのである。禅が日常の中に、宇宙を見るように、インターネットという宇宙もまた、わたしたちの「いま・ここ」に他ならないのだ。

### 【主要参考文献】

- マーシャル・マクルーハン『人間拡張の原理』竹内書店、1967
- 西垣通『情報学的転回』春秋社、2005
- 坪田知己『2030 年メディアのかたち』講談社、2009